

ジョン万次郎について

文：鮫川太一

貧しい漁師に生まれ9才の時父が亡くなり、14歳の時仲間5人で足摺岬へ漁に向かいシケに遭い、漂流。

海上760キロ南、太平洋の島に漂流し、そこで半年ほど無人島サバイバル生活。

この島にやってきたアメリカ捕鯨船に助けられ、この船のホイットフィールド船長は何事にも熱心に取り組む万次郎を高く評価した。万次郎は船長とともにアメリカに行くことを決断し、船長の養子として共に暮らし、学校では英語・数学・航海術・造船技術を学んだ。卒業後、捕鯨船に乗り数年の航海を経た後、日本に帰国することを決意。1851年琉球（今の沖縄県）に上陸し、1年9カ月後にやっと土佐へ帰れて母と再会した。

その後、高知城下の藩校「教授館」の教授となり、後藤象二郎、岩崎弥太郎等が直接指導を受けたようである。さらに幕府に招へいされ直参となり、ペリー来航によりアメリカの情報や翻訳や通訳、造船指揮など精力的に働いたが、尊王攘夷の急先鋒、水戸藩主徳川斉昭が「万次郎はアメリカに恩義があるから開国を進言しているのだろう。」と開国に反対したため、ペリーの通訳の仕事を外された。しかし、1860年日米修好通商条約の批准書交換のためにアメリカへ行く使節団で「咸臨丸」艦長勝海舟の通訳と実質的な船長として乗り込むこととなった。

島崎藤村の小説「夜明け前」には、「横浜は寂しいところです。」という一節がある。横浜は品川よりはるかに小さな寒村であったが、今や日本第2位の人口になっている。万次郎の開港予言は当たっていたのである。